



新教出版社 出版通信

2025年
7月

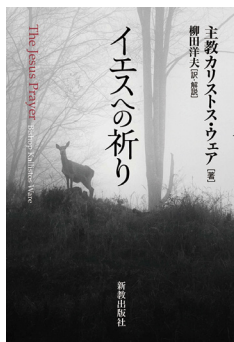
〒112-0014 東京都文京区関口1-44-4 Tel: 03-3260-6148 Fax: 03-3260-6198
ホームページ: <https://www.shinkyo-pb.com/>

イエスへの祈り

主教カリストス・ウエア [著] / 柳田洋夫 [訳]

主イエス・キリスト、神の子よ、
私を憐れんでください

この究極的に短い祈りは、東方教会で長く用いられてきた射^{しや}禱^{とう}である。本書は、この祈りの歴史、その豊かな神学的意味、そして祈りの実践方法までを懇切に解説する。真実の祈りが現代人から失われつつある今、この短い祈りが私たちに教えるものは大きい。



著者の Kalistos Ware は正教会の神学者。1934年イギリスで国教会の家庭に生まれたが17歳で正教会の礼拝に感動し、58年に改宗。オクスフォードで古典と神学を学ぶ。66年司祭に叙階。母校で教鞭をとる一方、ディオクレアの府主教になるなど教会の要職を歴任。他に邦訳『正教の道』がある。2022年没。
訳者のやなぎだひろ氏は聖学院大学教授。日本基督教団教師。

◆小B6判・130頁・定価1870円

6月25日発売

「目次より」

- 1 「イエスへの祈り」とは何か
- 2 四つの「成分」
- 3 どこにいてもキリストを見出す
—— イエスへの祈りの実践法
- 4 静寂を創り出す
- 5 小さなせせらぎ
- 6 私たちを助ける三つのこと
- 7 霊の祈り
- 8 三位一体とイエスへの祈り
- 9 サクラメントとイエスへの祈り
- 10 とりなしとイエスへの祈り
- 11 静寂によって行動する
- 12 家に帰る

私が出会った人々

神の庭にて

6月23日発売

大野恵正「著」

◆四六判・192頁・定価1980円

懐かしい恩師、信仰の友、そして愛妻まで、神から与えられた忘れがたい出会いを綴る珠玉の随想集

「私という人間は、私ひとりによる自己形成の結果などではなく、人生の道々で出会った数々の人々との触れ合いの中で形づくられたものである。」（本書より）

本書に登場する人々たち 奥野政元先生／斉藤宏先生と潤さん／松本美実先生／松野直喜さんと詩子さん／マルコ・マリ・ド・ロ神父／音楽の先生方／指揮者ヘルベルト・ブロムシュテット先生／仲田豊さん／左近淑先生／福田正俊先生／盛谷祐三牧師と聖子さん／相田武さん／小泉博さん／小柳茂さん／石井次郎先生／高崎毅先生／加茂巖先生と美恵子さん／清水恵三牧師と寿子さん／落忠男先生／井上良雄先生／高橋良隆先生／笠原光雄さんと桂子さん／仲田和子さん／ズザナ・ルージュコヴァさん／大住雄一先生／中村哲先生／森岡巖さん／渡辺信夫先生／大野佳子さん



【著者】おのおのよしまさ氏1939年東京生まれ。東京神学大学大学院修了。活水女子大学名誉教授。新共同訳聖書旧約部門翻訳委員を務めた。著書『旧約聖書入門』1、4、『神の言葉と契約』他。

最近のオンデマンド化から

戦争・平和・キリスト者

ローランド・ベイントン著／中村妙子訳

◆A5判・定価5995円

ヒトラー政権の共犯者、犠牲者、反対者

《第三帝国》におけるプロテスタント神学と教会の《内面史》のために

H.E. テート著／宮田光雄・佐藤司郎・山崎和明訳

◆A5判・定価9900円

キリストに従う

ディートリヒ・ボンヘッファー著／森平太訳

◆四六判・定価5280円

ジャン・カルヴァン著／堀江知己訳

イザヤ書註解Ⅱ

11章 27章

イザヤ書註解は、カルヴァンにとつて初めての旧約聖書註解であり、1551年に出版された。改革者がヘブライ語の深い知識に基づいて、どれほど真剣に預言書に取り組んだかが如実に伝わってくる。詩篇註解に比肩する膨大な分量であり、邦訳では全5巻となる予定。

A5判・予価7000円

ヴォルフハルト・パネンベルク著／佐々木勝彦訳

組織神学 第二巻

邦訳全三巻がついに完結。この第二巻では、創造論、終末論、人間学、キリスト論、和解論が独特無比な仕方で開催され、20世紀の後半における最大の組織神学的収穫であるパネンベルクの体系の、中核と全貌がここに明らかとなる。

A5判・予価9000円

▼オンデマンド復刊

井上良雄著

神の国の証人ブルームハルト父子

強烈な終末論的信仰や社会主義運動への参画によつて矚目され、カールバルトにも決定的な影響を及ぼしたドイツの牧師ブルームハルト父子。その二代にわたる牧会と社会運動への挺身を描き切った、渾身の神学的評伝。

四六判・定価6050円

● 5月に出た本と雑誌

あかりを灯しつづけて37年

大野顯二著

兵庫県の小さな町。歴史があり、差別があり、人の営みがある。そして教会が立っている。牧師は町の人々と交わり、愚直に聖書の使信を語り続け来た。時にはうつを患いながら……。16編の説教と、自らの歩みを振り返る4回の講演を収録。キリスト者であるとは・牧師であるとは何かを問いかける。



◆四六判・定価1430円

福音と世界

◆定価660円

6月号 特集Ⅱパレスチナを〈視る〉わたしたち

寄稿者…金在原、北川眞也、守中高明、五井健太郎、友常勉、彫真悟

『イメージ、それでもなお』のアクチュアリティ(橋本一徑)東北では、こんな読書会をやっています(川上直哉)

短期連載 わたしたちキリスト者は天皇制をどう考えるべきか(石田亨)

好評連載 富田正樹、福嶋揚、田島卓、今高義也、長尾優、山崎ランサム和彦

販売部から

最近、出エジプト記に記されている「十戒」を読み返す機会がありました。その個所を読みながら思い起こしたのは、「シナイ契約」のしるしが安息日であること、後に安息日を重視するあまり結果として律法主義を招いたこと、ユダヤ教のラビたちは今日でも聖書の中で最も重要な祭りが安息日であると考えていること、などでした。さて小社から「十戒——教会のための講解説教」(ヴァルター・リユティ著、野崎卓道訳)が出ています。同書の「第四戒 祝日」でリユティは、安息日に関して、神が六日間で天地を創造され七日目に御自分のすべての御業を完成して安息され、この日を祝福し聖別されたことを念頭に置きつつ、「この日は交わりの日、とりわけ創造主と被造物との交わりの日なのです」(63頁)と述べ、続けて「ナーフアシュ」という原語に注目し、被造物と共に「ほっと一息つかれた」(64頁)と印象的な言葉を述べています。これは「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのものにきなさい。休ませてあげよう」(マタイによる福音書11章28節)に通ずるメッセージだと思われました。本書には他にも十戒を理解するうえで示唆に富む内容が豊富に記されていますので、機会がありましたらぜひ手にとってお読みください(坂谷内)

出版部から

小社は5月末に株主総会を行い、前年度の総括を行いました。昨年4月から今年3月までの新刊は以下の通りです。『奴隷より身を起こして』(ブッカー・T・ワシントン)、『滝沢克己の現在』(滝沢克己協会編)、『クイア神学入門』(クリス・グリノフ)、『内村鑑三問答』(鈴木範久)、『ロゴセラピー』(エリーザベト・ルーカス)、『現代エキメニカル運動史』(藤原佐和子)、『聖書学と信仰者』(ブレットラー、ハリントン、エンス)、『善き力』(イルゼ・テート)、『倫理』(D B W 版新訳)、『ボンヘッファー』、『戦後日本とキリスト教』(富坂キリスト教センター編)、『ユーモア入門』(宮平望)、『平和の福音に生きる教会の宣言』(吉田隆、長谷部弘、弓矢健児、豊川慎)、『非戦と抵抗の教育』(鈴木文治)、『静寂者ジャンヌ』(山本賢蔵)。点数が14点に留まったのは、社屋移転に力を削がれたためでした。また専門書店の閉店など環境も厳しさを増しています。しかし今期はカルヴァンのイザヤ書註解の続刊や、ラディカル・オースドクシの教本とも言えるミルバンクの『神学と社会学論』、ボンヘッファー『獄中書簡集』の新訳、また『福音と世界』の連載から『ルカ福音書』『日本的キリスト教を読む』『教会のマイクログレッション』など力作が目白押しです。ぜひご期待下さい。(小林)

福音と世界

2025年
7

A5判・80頁・定価660円・送料70円
年間予約購読料(送料共) 8760円

特集・ジェンダー・宗教・現代日本

女性存在の近代日本思想史という可能性

——上原麻有子

日本の神学・キリスト教研究における

「フェミニスト神学」の状況——朝香知己

フェミニズムに対する「誤解」と「錯覚」、そして「語りにくさ」——神山美奈子

浄土真宗と女性——真宗大谷派における

ジェンダーの現状と課題——谷口愛沙

キリスト教系新宗教とジェンダーの問題——山口瑞穂

日本のエホバの証人の事例から——山口舞

ひとり親家庭支援の現場から——松田

わたしたちキリスト者は天皇制をどう考えるべきか2

——石田 学

【時評】いまドイツで何が起こっているのか——吉田 新

【新連載】人物・日本キリスト教史1——戒能信生

【好評連載】

◆ばやし牧師のさすらい説教録 4——富田正樹

◆異端者の世界航海 4——福岡 揚

◆証言としての旧約聖書 15——田島 卓

◆八木重吉の聖書 24——今高義也

◆私は告白する、私の神を 28——長尾 優

◆新約釈義 ルカ福音書 43——山崎ランサム和彦